

「堀部安兵衛」

著者 池波正太郎

角川文庫(上:478p/680円, 下:448p/680円)

紹介者:榎本博康

[紹介]

中山安兵衛は越後國の新発田(しばた)に生まれる。既に母を亡くした彼は、子供の頃から父弥次右衛門に厳しく剣を鍛えられるが、その父が閉門の上、自害する。14歳の少年の上に突然起こった悲劇であった。彼は中山家の再興を期すが。

そして25歳の時に高田の馬場の決闘。義理の叔父、菅野六郎左衛門を助けて、中村兄弟を倒す。これにより剣名が大いにあがり、播州赤穂の浅野家の家臣、堀部弥兵衛に見込まれて、その婿となった。

さらに7年、松の廊下の事件が起き、彼の人生はまたも大きな転機を迎え、吉良邸への討ち入りへと続く。



[感想]

どの走友会にも、ひとり位は飲ん兵衛安と呼ばれる人がいる。全員の所もあるかも知れない。これは、ご存知の通り、高田の馬場18人斬りの講談に由来する。講談ではどういストーリーか、柴田錬三郎の「堀部安兵衛」(廣済堂, 1978)の導入部から孫引きする。

八丁堀の棟割長屋でごろごろしていた、飲兵衛でぐずで喧嘩好きの中山安兵衛は、叔父の堀部弥兵衛が村上兄弟と果たし合いをする手紙を1刻遅れで読むや、血相を変えて太刀をわし掴みにし、高田の馬場に向かう。途中穴八幡の酒屋にとびこんで、冷や酒を一升樽で一息にぐぐーっと飲み干す。約8キロの激走の末、決闘場に駆け込むと、堀部弥兵衛の娘の燃えるような緋縮緬(ひぢりめん)のしごきを借りうけて襷(たすき)にかけ、ばったばたと斬り伏せたあ〜、パパンパン。

所が事実はかなり違うらしい。まず安兵衛は剣もたつが学問にこそ秀(ひい)でた、ひとかどの人物であつたらしい。これは先の柴田錬三郎の本文でもあり、本書の内容でもある。

そこで柴田錬三郎も考えて、その本文では酒を飲まずに8キロを走るが、池波正太郎の小説では酒はもとより、安兵衛は走りもしない。あらかじめ決闘を知り、現場を事前調査し、そして時を待って叔父と同行する。全然違うのだ。

巷間に普及している飲ん兵衛安のイメージは講談によるものだが、作者はどうしてそれを払

拭できたのだろうか。そのヒントは、同じ作者の「江戸切絵図散歩」(新潮文庫)にあった。これは作者が集めた江戸の古地図に従って、現在の東京を散歩する趣向である。また作者の手によるスケッチや写真があり、実に楽しい、すばらしい本である。

この中で、彼は高田馬場の決闘を2回書いたとある。まず昭和34年に辰巳柳太郎主演の新国劇。講談では8キロを駆けるが、これでは余りに無茶だと思い、新宿の長屋から1キロ程駆けて行くことにした。一方観客受けするように30人位も斬ったという。

しかし、昭和40年から新聞小説として書いた本作品では、そのような無茶はできないと思った。読者は全国だ。相手は村上兄弟と宿敵中津川祐見を入れて4人、こちらは3人ということで描いた。その代わり濃密に決闘を描き30人よりはるかに大変だったという。

所で、仮名手本忠臣蔵の四段目(判官切腹の場)で判官(≡浅野内匠頭(たくみのかみ))が切腹するとき、家老である大星由良助(≡大石内蔵助)が駆けつけるのを待ちわび、「由良助はまだか」と問い続けるが、ついに切腹の刃を腹に立てた後で走り込む。

またさらに内匠頭の供侍の勘平は腰元のお軽と密会していて、主君の大事である松の廊下の刃傷(にんじょう)事件を知らず、供に遅れた責任を逃れる意味もあって駆け落ちしてしまう(三段目)。そして、高田の馬場は忠臣蔵の外伝だが、叔父の窮状に安兵衛は必死に駆けつけたがやはり間に合わない。どうもここに日本の「遅刻の美学」があるような気がするが、別途考えてみたい。

さて、講談版の高田の馬場は、ひとつのランニングのイメージを日本人に深く植え付けた。それに対して池波正太郎の「走らない高田の馬場」には、小説家の良心を見ることができる。

一方、作者は読者サービスに安兵衛に酒を飲ませた。その時19歳の彼は未だ酒を知らないのだが、今の早稲田大学付近の林光寺の住職に酒を鍛えられる設定である。飲み、何日もかけて苦しみ、やがて陶然たる酒の世界に至る描写は、かなり嘘なのだが、読者が思わず引き込まれてしまう筆の力がある。私もこういう境地で酒を飲んでみたいものだ。

(1998. 4. 25)

[リバイバル感想]

本当に一升酒を飲んでから8kmを走るレースがあれば出てみたいが、さすがに無いようだ。主催者のリスクが大きすぎるのだろうか。しかしフランス・ボルドーのメドックマラソン(MARATHON DU MEDOCE)ではエイド毎にワインがあり、フランスの安兵衛達が挑戦する。友人たちが参加した時に私も行きたかったが、当時はサラリーマンの身、泣くなく断念した。

告白すると(というような、大げさなものではないが、)サロマ湖ウルトラマラソン100キロでは、3か所にスペシャルドリンク(自分で用意した飲み物)を置けるが、それぞれにアルコールを入れている。そして最後の80キロ手前は清酒1合と決めていた。もちろん、外観からはそうは分からない容器入りだが。

ある時のレースで、途中で時間を使ってしまい、80キロの関門にすれすれとなってしまった。当時は感覚で10秒単位程度には時間が分かるようになっていた。エイドはその手前の坂の下に

ある。ドリンクを手に取るだけでも間に合わない。テントの下のテーブルの上の「僕の清酒一合」を左目の隅に掠（かす）めながら、断腸の思いで急な坂を駆け上った。遅刻の美学なんて要らないとばかりに。予想よりも関門が遠い。見通しが悪くて関門が見えず、不安になる。必死にピッチを上げる。そして数秒の差で関門を通過した。電子計測の音がピピッと鳴る。

これは1998年6月のこと、丁度この初稿を書いた直後のことであった。なお残りの20kmは3時間であり、ワッカ自然公園の砂洲の植生と風景を楽しみながらゆっくりと走ることができる。行きは右手がオホーツク海、左がサロマ湖。そして折り返してゴールへ。僕の後ろにはほとんど誰もいない。この天国のような場所に到達することで、全ての苦労が報われる。



制限時間13時間の3分弱手前のゴールでした。実は制限時間すれすれを狙ったのだが、どうしてもそこまで遅くできなかった。

(2020. 6. 22)